

# 保育者養成校における学生の音楽の活動についての意識調査と 子どもの育ちのための音楽的専門性との関連についての一考察

－保育者養成課程の短大生を対象とした計量テキスト分析からの検討－

白 崎 直 季 幼児教育科

(2023年10月2日受理)

## 〔 要 約 〕

本研究は、保育者養成校の学生における音楽の活動についての意識と幼少期の音楽体験の関連を手がかりとして、保育者養成校における音楽的専門性についての教育内容の開発方法を探ることを目的とした。意識調査および計量テキスト分析から、幼児教育の現場ではピアノを演奏することが必要であると考えている学生が多く、子どもの精神的、身体的な育ちにとって幼少期の音楽体験は重要であると考えている傾向があることが示された。これらのことから、保育者養成課程において子どもの様々な育ちにとって必要な音楽的専門性を学生に習得してもらうことの重要性が改めて認識できたため、新しく創設された領域及び保育内容の指導法に関する科目においての授業計画を検討するなど、多角的な方面からの教育方法を検討していくことが必要である。

## 1. 序論

### 1. 1はじめに

平成29年に告示された教育職員免許法改正に伴い、本学の幼稚園教諭養成課程は文部科学省による再課程認定を経て、令和4年度から新しいカリキュラムがスタートした。そこには幼稚園教育要領に示す5領域の教育内容を理解し、指導するために必要な資質能力を備えた教員を養成すべく、従来から変更した科目として「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が新しく創設されることになった。

文部科学省から委託を受けた一般社団法人保育教諭養成課程研究会による「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」<sup>1)</sup>では、幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムが示されており、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」の科目構成は、「イ 領域に関する専門的事項」「ロ 保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」であり、イとロを合わせて一種は16単位、二種は12単位を修得する。科目構成の考え方として、「それぞれの養成課程において、「どのような幼稚園教諭を育てるか」、「どのような学問的基盤や幼児教育に関わる専門性をもった教員がいるか」により、一種16単位（二種12単位）の内訳は異なる。それぞれの創意工夫によって、質の高い教職課程のカリキュラムを編成していただきたい」という内容が示されている。

また、「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究」に示されているモデルカリキュラムでは5領域の着実な実践力をもった幼稚園教諭を養成することを目指し、イ 領域に関する専門的事項で、「幼児と健康」、「幼児と人間関係」、「幼児と環境」、「幼児と言葉」、「幼児と表現」という名称の科目をそれぞれ1単位ずつ計5単位、ロ 保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）においては、「保育内容『健康』の指導法」、「保育内容『人間関係』の指導法」、「保育内容『環境』の指導法」、「保育内容『言葉』の指導法」、「保育内容『表現』の指導法」をそれぞれ2単位ずつ、そして「保育内容総論」を1単位として示している。この調査研究においては5領域をバランス良く扱うために、各領域に1単位ずつ、指導法を2単位ずつとしているが、どのような幼稚園教諭を育てるかにより、例えば「幼児と健康」で1単位、「幼児と人間関係・言葉」で2単位、「幼児と環境・表現」で2単位とするなど、複合的な科目を想定することも可能であるとしている。また逆に「幼児と健康」で2単位にすることや、「保育内容総論」を2単位にすることも可能であることを示している。新教職課程の「領域及び保育内容の指導法に関する科目」は、領域論と指導法からなっているが、必ずしもそれぞれの単位数が決まっているわけではないということが示されている。

その中で、幼稚園教育要領が定める5領域として、

「表現」についてはや音楽分野、造形分野など、それぞれの幼児の表現活動を想定した科目を開講している例が多い。源らによる「保育内容」研究の在り方に関する一考察では、保育者養成校における担当教員の専門分野の実態を調査している。保育内容「表現」に関しては、調査対象として有効であった保育者養成校338校のうち、「表現」に相当する授業担当の専任教員が504名確認され、一校に複数の専任教員がいる養成校が多かったとしている。その理由を、「各校のシラバスを見ると「表現」については、1つの授業科目としてではなく、「音楽表現」「造形表現」「身体表現」など分割して授業を行っている大学・短期大学が多いことによるものだと考えられる。」<sup>2)</sup>と述べている。

また、一般社団法人保育教諭養成課程研究会によるモデルカリキュラムにおいても、保育内容「表現」については領域に関する専門的事項において「幼児と表現A」と「幼児と表現B」、保育内容の指導法においても「保育内容「表現A」の指導法」と「保育内容「表現B」の指導法」のそれぞれモデルカリキュラムをそれぞれ2つずつ示している。「保育内容「表現A」の指導法」のシラバス案の「授業の全体構想の仕方について」には、「身体・音楽・造形・言葉といった括りにとらわれず、総合的な表現を学び実践するモデル案である」ということが示されており、「保育内容「表現B」の指導法」のシラバス案では、「具体的に音楽を専門とする担当教員を想定して展開している。」<sup>3)</sup>とも記載されている。

また、「保育内容「表現A」の指導法」における「5. その他の事項」では「学生の表現力を高めるための技能を学ぶ体育、音楽、造形、演劇などの専門科目に関しては、「大学独自の科目」として開講することも考えられる。」<sup>4)</sup>と書かれ、「幼児と表現B」における「5. その他の事項」においては、「音楽表現の技術は一朝一夕に身につくものではない。歌唱や器楽、伴奏法といった音楽の専門科目に関しては、各養成校の特色に応じて「大学独自の科目」として開講されることも考えられる。」<sup>5)</sup>と記載されている。しかし、「大学が独自に設定する科目」は幼稚園教諭一種では14単位、二種では2単位となっていることから、これらもふまえて、他領域とのバランスを総合的に考える必要がある。

## 1. 2本研究の問題意識

これまで述べた背景から本学のピアノの実技に関する科目はこれまで1年半をかけて合計45回あった授業数から「大学が独自に設定する科目」として半期15回、(年間30回)として開講されることになった。ま

た、器楽の授業とは別に歌唱に関する科目も令和3年度までは1年半をかけて45回開講されていたが、令和4年度入学生から開講されていない。これらのことから、入学時にピアノの演奏経験が全くない学生や初級者が半数を占める本学の学生にとって、2年間の在学のうちの1年間でピアノの演奏技術、歌唱の表現技術を習得することは、非常に厳しい道のりであることは想像に難くない。幼児教育の現場においては幼児の歌唱や音楽活動を行うにあたり、保育者が鍵盤楽器を用いていることはまだまだ多く、学生の保育現場における実習においても、ピアノを弾く経験をするのがほとんどである。

このことから、将来の保育者を育成する役割を担う保育者養成校では、保育現場における音楽的専門性をどのように育てていくかを、多角的な視点から検討していく必要があるということが考えられる。山本らによる保育者養成における音楽的専門性の育成に関する研究の中で、これまでの保育における音楽的専門性の先行研究の分析から「『音楽的専門性』と一言で表してみても、その詳細は多様であることがわかる。しかしながら、各発言の底流にあるのは、ピアノの演奏技術向上と、子どもを中心に考える発想をどのように織り交ぜていくべきかということであり、つまり保育者としての音楽的専門性とは、まさにこの二つの側面をバランスよく取り入れ融合したものといえる。」<sup>6)</sup>と述べている。

そこで本研究は、保育者養成校の学生における音楽の活動についての意識と幼少期の音楽体験の関連を手掛かりとして、保育者養成校における音楽的専門性についての教育内容の開発方法を探ることを目的とした。

## 2. 研究方法

### 2. 1 調査対象者

東北地方のU学園短期大学の1年生74名および2年生84名のうち、質問フォーム記入漏れ等の不備がなかった1年生63名、2年生71名、合計134名を対象とした。なお、調査の実施にあたっては、事前に調査の概要を説明し対象者の同意を得た上で実施した。調査期間は1年生、2年生ともに2023年7月に実施した。また、質問文に付記されているアンケートには、「質問項目名」は記載されていない。

## 2. アンケート調査の内容

アンケート調査の内容は以下の通りである。

1. あなたの学年を教えてください
- 2-1. 音楽は好きですか？
- 2-2. 歌うことは好きですか？
- 2-3. ピアノを弾くことは好きですか？
- 2-4. 上記（2-1. ～2-3.）の質問において1つでもいいえと答えた方は理由を簡単に教えてください。  
(質問項目名：音楽全般に対する印象についての質問)
- 3-1. 幼少期に通っていた施設種別を教えてください。
- 3-2. 幼少期に通っていた施設では毎日歌うことはありましたか？
- 3-3. 幼少期において歌ったり楽器を弾いたりすることは好きでしたか？
- 3-4. 3-3. の質問でいいえと答えた方はその理由を簡単に教えてください。
- 3-5. 幼少期において印象に残っている音楽体験はありますか？（自分の歌唱や演奏の体験だけでなく鑑賞の経験も含む）
- 3-6. YESと答えた方は体験の内容を具体的に教えてください。  
(質問項目名：幼少期における音楽体験についての質問)

- 4-1. 幼児教育の現場においてピアノが弾けることは必要だと思いますか？
- 4-2. その理由を簡単に教えてください。  
(質問項目名：幼児教育の現場においてのピアノ演奏の必要性についての質問)
5. あなたは、幼児にとって音楽的な体験や音楽的な遊び（手作り楽器など）をすることはどのような意義のあるものだと思いますか。自由にお書きください。  
(質問項目名：幼児の音楽体験の意義に関する自由記述質問)

## 3. 結果と考察

本研究によって得られた結果は以下の通りである。上記の質問4-2及び質問5における自由記述については、樋口が開発したKH Coder 3.Beta.07e（以下、KH Coderと表記する）を用いて計量テキスト分析を行った。分析実行にあたって、対象となるテキストデータをKH Coderを用いて分析可能な状態にする前処理を行い、語の抽出と共起ネットワーク図を作成した。

### 3. 1 学年についての質問

結果は、2. 1 の調査対象者の内訳で示した通りである。

### 3. 2 「音楽全般に対する印象についての質問」について

質問2-1. から2-3. の結果はFIGURE 1 からFIGURE 6の通りである。音楽は好きですかという質問に3件法で回答してもらったが、1年生、2年生とも8割を超えて音楽が好きと回答しており、いいえと回答した学生がいなかったことが特徴として挙げられ

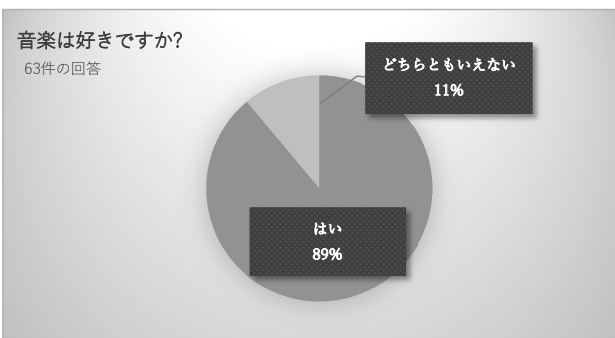


FIGURE 1 1年次学生の音楽に対する印象

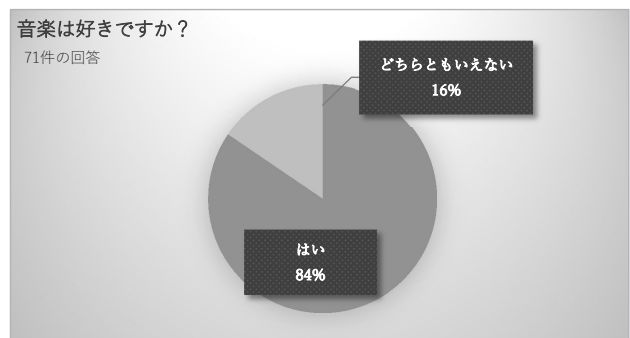


FIGURE 2 2年次学生の音楽に対する印象



る (FIGURE 1, 2)。この回答から質問 2-2、2-3 とは違い、自分が演奏したり、歌唱したりといった行為をイメージさせるものではなく、どちらかという自分の好きな音楽を聴くなどの受動的なイメージしていることが考えられるが、少なくとも音楽が生活の中で身近に感じ、好意的に受け止めているということが窺える。同様に質問 2-2. に対しても 1 年生と 2 年生では多少割合は変わるが、ほとんどの学生が歌うことが好きと回答している。ここの回答ではいいえと回答している学生がいることが特徴として挙げられる (FIGURE 3, 4)。2-3. の質問においては、1 年生の回答と 2 年生の回答での結果に差異が見られ、1 年生はピアノを弾くことが好きと回答している割合が 49% と 1 番多いが、2 年生においてはどちらともいえないが 1 番割合が大きく 41% という結果になった。また、2-4. の質問において 2-1. から 2-3. までの質問にいいえと回答した学生に理由を回答してもらったところ、回答件数は 1、2 年生合わせて 20 件あった。そのうち質問の主旨に沿っていない 2 件の回答を除いて集計したところ、「うまくできない (弾けない、歌えない)」と回答したのが 6 件、「苦手である」と回答したのが 5 件、「難しい」と回答したのが 4 件、「得意じゃないから」、「音痴である」、「人前で弾くと緊張するため」と回答したのがそれぞれ 1 件ずつであった。

つであった。

### 3. 3 「幼少期における音楽体験についての質問」について

質問 3-1. の施設種別の内訳はグラフの通りである (FIGURE 7, 8)。質問 3-2. の回答では毎日歌っていた経験を持つ学生が 1 年生、2 年生とも最も多く、ほとんど歌うことがなかったと回答している学生は 1 年生で 5%、2 年生で 3% という結果になった (FIGURE 9, 10)。3-3. の質問の回答については、1 年生、2 年生とも幼少期において歌ったり楽器を弾いたりすることは好きだと回答した割合として 1 年生が 76%、2 年生が 69% という結果が得られた。また、質問 3-4. においては 7 件の回答があり、「難しかった」が 2 件、「苦手」、「歌うより体を動かす方が好きだった」、「歌うのが恥ずかしかった」、「カラオケが嫌いだった」、「下手って言われた」がそれぞれ 1 件ずつの回答があった。

質問 3-5. の結果はグラフの通りである (FIGURE 13, 14)。おおよそ 6 割程度の学生が幼少期において印象に残っている音楽体験をしていることがわかった。また、質問 3-6. の結果を大きく俯瞰してみると、「行事に関連する部分」と「生活の中での体験」という 2 つの構図が読み取ることができた。

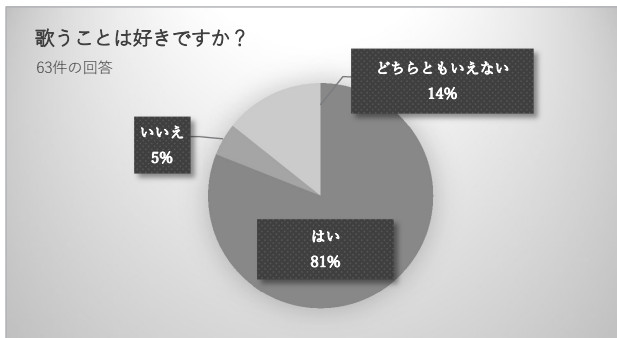


FIGURE 3 1年次学生の歌唱に対する印象

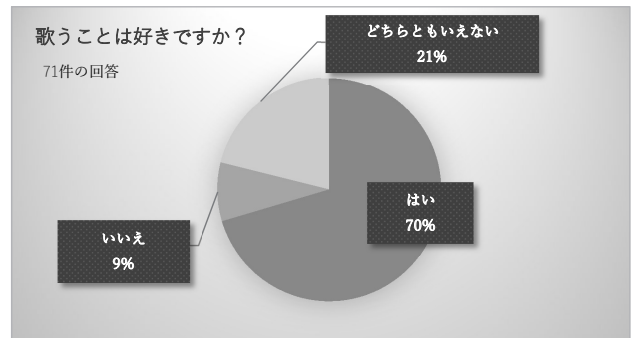


FIGURE 4 2年次学生の歌唱に対する印象

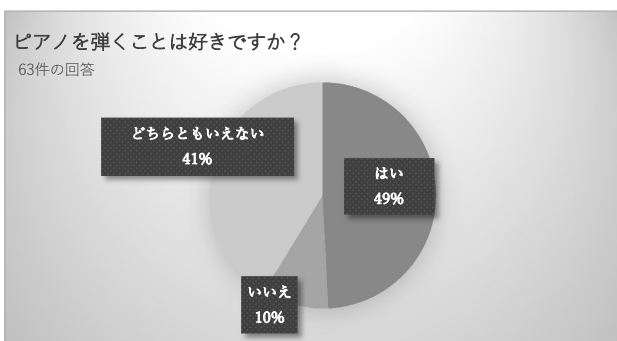


FIGURE 5 1年次学生のピアノ演奏に対する印象

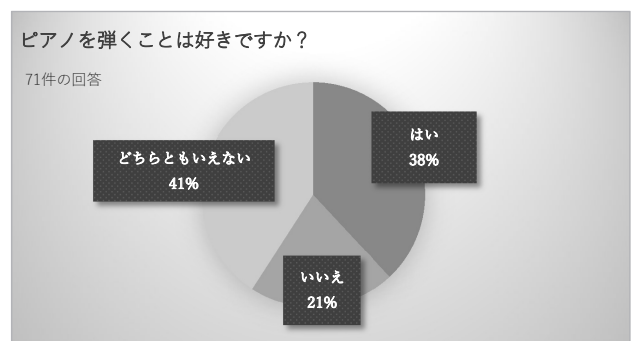


FIGURE 6 2年次学生のピアノ演奏に対する印象

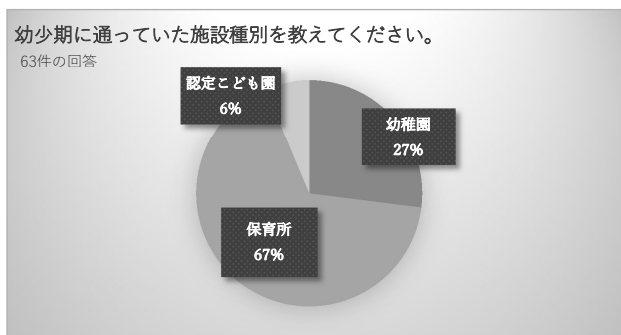


FIGURE 7 1年次学生の幼少期に通っていた施設種別

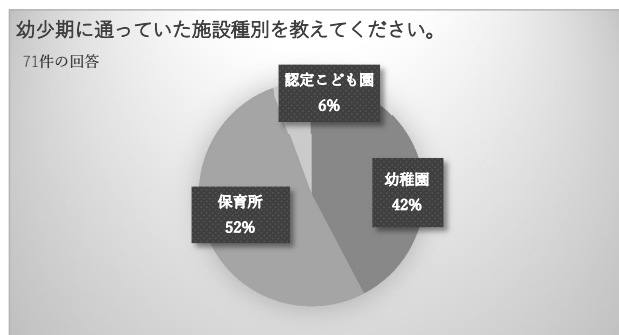


FIGURE 8 2年次学生の幼少期に通っていた施設種別

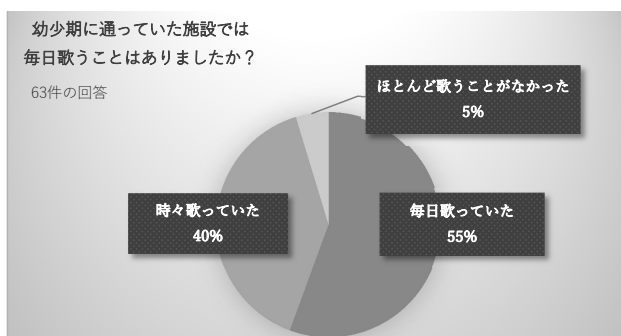


FIGURE 9 1年次学生の幼少期通っていた施設での歌唱頻度

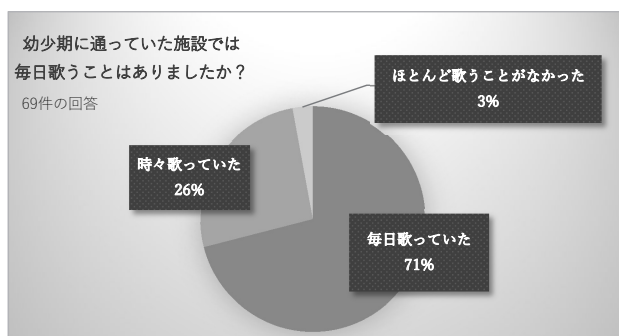


FIGURE 10 2年次学生の幼少期通っていた施設での歌唱頻度

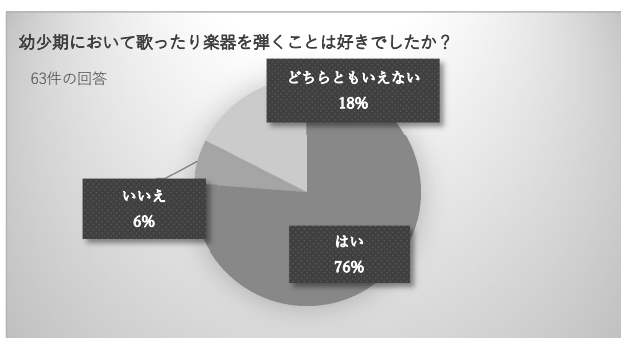


FIGURE 11 1年次学生の幼少期での音楽体験に対する印象

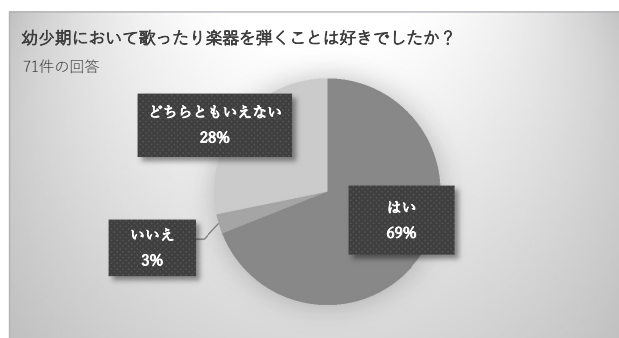


FIGURE 12 2年次学生の幼少期での音楽体験に対する印象

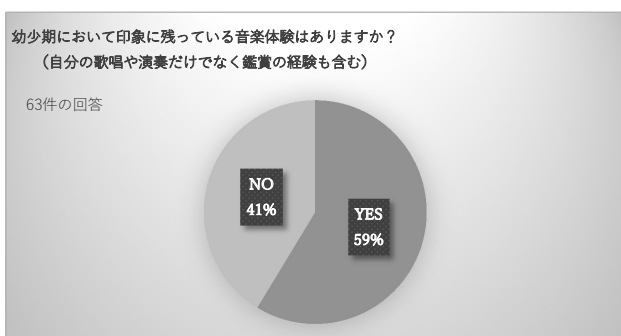


FIGURE 13 1年次学生の幼少期における印象に残っている音楽体験の有無

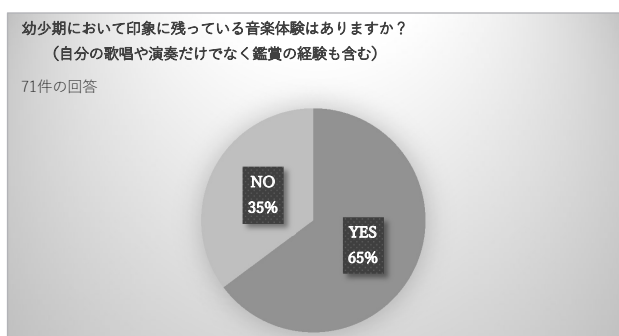


FIGURE 14 2年次学生の幼少期における印象に残っている音楽体験の有無

マーチングと回答したのが10件、クリスマス会や卒園式などの行事が16件、音楽会やお遊戯会などの発表会と回答が18件と多数を占めるなか、毎日の生活の中で歌ったり踊ったりした経験、ハンドベルや鍵盤ハーモニカなどの楽器を演奏した経験が10件という回答が得られた。その他にも自分の習い事や先生たちのダンスの鑑賞、音楽鑑賞会などの体験を述べている回答もみられた。

### 3. 4 「幼児教育の現場におけるピアノ演奏の必要性についての質問」について

質問4-1. における結果はグラフの通りである (FIGURE15, 16)。1年生、2年生ともに9割に近い学生が幼児教育の現場でピアノを弾けることが必要

であると感じていることが示された。

### 3. 4. 1 「幼児教育の現場でのピアノ演奏の必要性について」における計量テキスト分析の結果

質問4-2. の自由記述内容のテキストデータを前処理したところ、138文が抽出され、総抽出語数は1,727語、異なり語307語が抽出された。抽出語50語はTABLE1の通りである (TABLE1)。上位2語は「ピアノ」「思う」であったが、「思う」に関しては「～だと思う」といったような、それぞれの文脈の中で個人的な考えや推量を述べる場合で使用される語であるため、上位に位置しているものとする。またKH Coderを用いて共起ネットワーク図の出力を行った (FIGURE17)。共起ネットワーク図の作成に関し

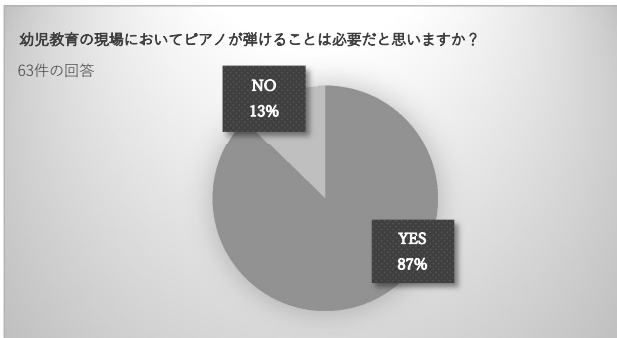


FIGURE15 幼児教育の現場でのピアノ演奏の必要性についての1年次学生の回答

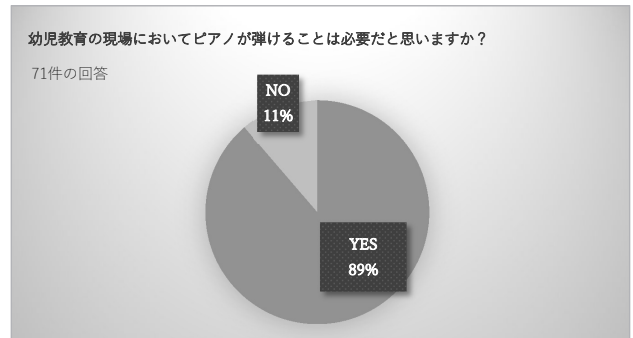


FIGURE16 幼児教育の現場でのピアノ演奏の必要性についての2年次学生の回答

TABLE 1 頻出語上位50語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
ピアノ	45	出来る	6
思う	43	先生	6
歌う	31	感性	5
音楽	23	合わせる	5
子どもたち	19	実際	5
弾く	19	踊る	5
弾ける	19	リズム感	4
子供	18	機会	4
楽しい	16	曲	4
楽器	13	好き	4
一緒	12	子	4
歌	10	時間	4
必要	10	触れ合う	4
楽しめる	9	多い	4
楽しむ	8	良い	4
触れる	8	コミュニケーション	3
親しむ	8	演奏	3
保育	8	音源	3
幼児	8	気持ち	3
CD	7	教育	3
音	7	繋がる	3
歌える	7	行事	3
大切	7	自分	3
活動	6	成長	3
使う	6	豊か	3

では、集計単位をセル毎（H5）とし、共起関連の描画に関しては、出現語の設定を頻出語上位50語とした。また、共起関連が見やすいように共起関係の係数を表示させ、最小スパニングツリーのみを描画した。

分析の結果、8つのサブグラフが検出された。第1サブグラフには「ピアノ」「思う」「歌う」など頻出語上位の3つのワードが含まれており、この問いの核になる部分と考える。他にも「弾ける」「楽しい」「必要」などの関連も見えるため、子どもたちと関わる一つの手段としてピアノを弾くことの必要性を感じているのではないかと考える。第2サブグラフは「感性」「豊か」「行事」などの語が含まれており、行事等での音楽に触れる機会を通して子どもの感性を豊かにすることが出来るのではないかとこの考えが見えてくる。また「音源」という語の自由記述内の前後の文脈を調べてみると、「音源だけに頼らずに」といった意見が2件、「音源を使用すればよいのではないかと」といった意見が1件あった。第3サブグラフは「楽器」「音」「触れる」「楽しむ」などの語が含まれている。これらからはピアノも含めた他の様々な楽器の音に触れることが大切という文脈として捉えることができると考える。第4サブグラフは「弾く」「実際」「先生」などの語が含まれており、第1サブグラフの「ピアノ」とも関連が見えることから、先生がピアノを弾

くことによる幼児への影響を示唆しているものではないかと考える。第5サブグラフは「コミュニケーション」「リズム感」「気持ち」「養う」などの語が含まれていることから、音楽に触れることでの様々な幼児の育ちに関してのサブグラフであると考えられる。第6サブグラフから第8サブグラフは語が2つずつのみ検出されている。それぞれ「一緒に楽しめる」、「教育に良い」、「活動に使う」といった意味合いで捉えることができると考える。

### 3. 5 「幼児の音楽体験の意義に関する自由記述質問」における計量テキスト分析の結果

質問5の自由記述内容のテキストデータを前処理したところ、138文が抽出され、総抽出語数は1,885語、異なり語349語が抽出された。抽出語120語はTABLE 2の通りである（TABLE 2）。上位2語は「音楽」「思う」であったが、上記の質問4-2. においての分析の中でも述べたように、質問5においても「思う」に関しては「～だと思う」といったような、それぞれの文脈の中で個人的な考えや推量を述べる場合で使用される語であるため、上位に位置しているものと考えられる。またKH Coderを用いて共起ネットワーク図の出力を行った（FIGURE18）。共起ネットワークの作成に関しては、集計単位をセル毎（H5）とし、最

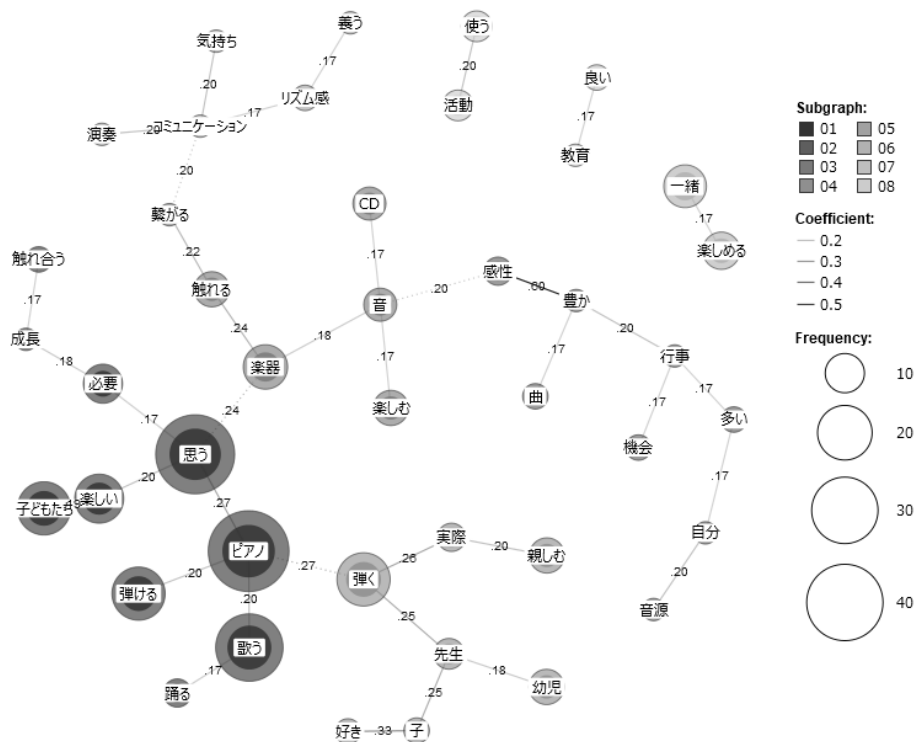


FIGURE17 幼児教育の現場でのピアノ演奏の必要性についての共起ネットワーク図

小出現回数を5回とした。共起関連の描画に関しては、出現語の設定を頻出語上位120語とし、共起関連が見やすいように共起関係の係数を表示させ、最小スパンニングツリーのみを描画した。

分析の結果、7つのサブグラフが検出された。第1サブグラフには「楽器」の語を中心として「自分」「表現」との関連が確認された。また、「興味」「様々」「持てる」などの語も確認されることから、楽器を扱うことで表現の幅が広がることを示唆するものと捉えることが出来るのではないかと考える。第2サブグラフは「体験」「意味」などの語が含まれており、音楽体験をすることに意味があり、「将来」という語も含まれていることから、長い目でみると音楽体験が何かの役に立つのではないかと考えていると捉えることが出来る。第3サブグラフは「感性」「心」「豊か」などの語が含まれている。これらからは領域「表現」の要素が含まれているサブグラフになっていると思われる。第4サブグラフで興味深いの

は「体」という語が含まれているところであるが、前後の文章を確認した結果、「体を動かす」という文脈として使用されていたため、音楽を使用しての身体表現のサブグラフとして捉えることが出来る。第5サブグラフは「触れる」から派生して「音楽」「楽しい」「思う」と続いているサブグラフであり、この質問の核となる語が含まれている。音楽を通して歌う楽しさ、音を鳴らす楽しさ、体を動かす楽しさを幼児が感じる事が出来るのではないかとこの音楽の喜びという文脈で捉えることが出来る。第6サブグラフでは「発達」「感覚」「音」の語から成っており、第5サブグラフの「触れる」と「音」からの関連も見えるため、音に触れることで様々な感覚が発達していくと考えていることが示されている。第7サブグラフは「右脳」から派生し、「能力」「教育」「向上」と繋がっていくことから、音楽と右脳の関係性からの教育効果の向上を捉えていることと考える。

TABLE2 頻出語上位120語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
音楽	38	経験	4	残る	2
思う	35	言う	4	子供	2
楽しい	33	広がる	4	社会	2
音	19	作る	4	手遊び	2
表現	19	持つ	4	周り	2
触れる	14	自由	4	小さい	2
豊か	12	習得	4	色々	2
楽器	11	聴く	4	触れ合う	2
リズム	10	動かす	4	神経	2
感性	10	友達	4	身	2
自分	10	良い	4	人	2
発達	10	コミュニケーション	3	成長	2
楽しむ	9	育てる	3	生きる	2
出来る	9	運動	3	増える	2
興味	8	感受性	3	達成	2
歌	7	関係	3	団結	2
子ども	7	協力	3	聴覚	2
歌う	6	好き	3	特に	2
感覚	6	広げる	3	発想	2
持てる	6	合わせる	3	必要	2
心	6	自己	3	幅	2
体験	6	親しむ	3	複雑	2
知る	6	養う	3	磨く	2
様々	6	力	3	味わえる	2
意味	5	メロディー	2	役立つ	2
右脳	5	育める	2	遊び	2
教育	5	演奏	2	幼児	2
繋がる	5	学ぶ	2	幼少	2
向上	5	感じる	2	理解	2
考える	5	感情	2	たくさん	1
将来	5	共有	2	イメージ	1
体	5	教える	2	スキル	1
大切	5	曲	2	プラス	1
能力	5	結果	2	ワクワク	1
育つ	4	研究	2	愛着	1
一緒	4	言語	2	意欲	1
覚える	4	言葉	2	違い	1
関心	4	行動	2	育む	1
機会	4	合奏	2	印象	1
気持ち	4	左脳	2	引き立てる	1



#### 4. 討論

本研究は、保育者養成校の学生における音楽の活動に対する意識と幼少期の音楽体験の関連を手掛かりとして、保育者養成校における音楽的専門性についての教育内容の開発方法を探ることが目的であった。

音楽全般の印象に対しては1年生、2年生とも8割を超えて音楽が好きと回答しており、いいえと回答した学生がいなかったことが特徴として挙げられることから、音楽が好意的に受けとめられているということが示唆された。歌唱することに関しても好きと回答している割合が多かったが、ピアノを演奏することにはやや消極的な印象を感じており、難しさや苦手意識を持っている傾向も見られることから、音楽や歌唱することは好きであるが、ピアノを弾くことに対しては抵抗を感じている学生が多いことが結論づけられるのではないかと考える。

幼少期における音楽体験については1年生、2年生とも幼少期において歌ったり楽器を弾いたりすることは好きだと回答した割合が1番高かった。また、FIGURE13、FIGURE14からは6割程度の学生が幼少期において印象に残っている音楽体験をしていることがわかった。その内容の結果を大きく俯瞰してみると、「行事に関連する部分」と「生活の中での体験」という2つの構図が確認された。それらの結果を踏まえる

と、幼少期の音楽体験において好意的だったり楽しかったりした体験が残っている学生の割合が多く、その経験はFIGURE 1 からFIGURE 4 の結果とも関連しているのではないかと推測できる。

幼児教育の現場においてのピアノ演奏の必要性についての質問については、9割に近い学生が幼児教育の現場でピアノを弾けることが必要であると感じていることが示唆された。その理由として、自由記述をもとにした計量テキスト分析から、ピアノを弾くことで子どもたちと楽しく歌うことが出来るといった「子どもと関わる一つ的手段としてピアノを弾くことの必要性」、行事等で音楽に触れる機会通して「子どもの感性を豊かにするために必要であるといった考え方」、「先生が実際にピアノを弾くことでの幼児への影響」、「音楽に触れることでの様々な幼児の育ちにとってピアノを弾くことが必要である」と考えていることが特徴として見られた。また、FIGURE17から子どもたちと関わる一つ的手段としてピアノを弾くことの必要性、先生がピアノを弾くことによる幼児への影響、音楽に触れることでの様々な幼児の育ちについてのサブグラフが共起されたことから、学生が子どもの育ちを中心にして音楽との関わりを考えているのではないかと思われる。これらのことから、子どもの育ちや子どもとの関わりにおいてピアノが演奏できることが必要

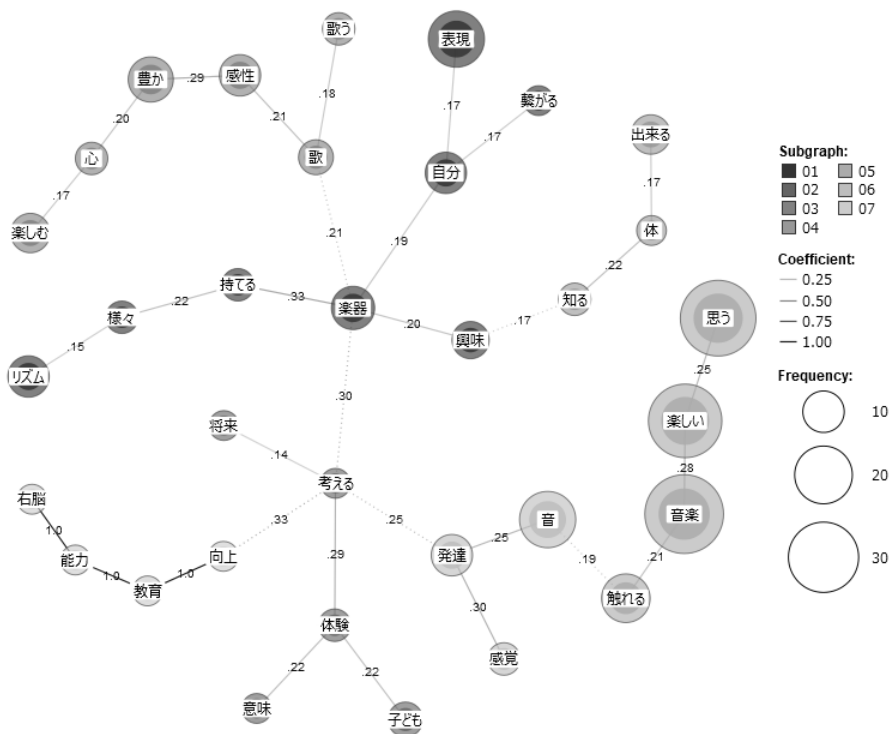


FIGURE18 幼児の音楽体験の意義に関する自由記述質問における共起ネットワーク図

であるといった子どもの育ちという視点に立った発想が学生の中にあることが窺える。一方で、FIGURE 5、FIGURE 6で示したようにピアノ演奏においては抵抗を感じている学生が多い傾向にあるため、保育者養成校においてはピアノを弾くことの必要性和ピアノ演奏に対する印象の溝をどのように埋めていくかの検討が必要であると思われる。

幼児の音楽体験の意義に関する自由記述質問についての計量テキスト分析からは、「楽器を扱うことでの表現の幅の広がり」や長い目でみると音楽体験が何かの役に立つのではないかといった「音楽体験をすることによる将来への有効性」、感性や心を豊かにすることをねらいとした「領域「表現」の分野としての意義」、「体を使った身体表現」、音楽を通して歌う楽しさ、音を鳴らす楽しさ、体を動かす楽しさを幼児が感じることが出来るといった「音楽の喜び」、音に触れることでの「様々な感覚の発達」、幼児期に音楽に触れることでの「音楽と右脳の関係性からの教育効果の向上」といった意義を感じていることがわかった。これらのことから、子どもの精神的、身体的な育ちにとって幼児期の音楽体験は重要であると考えている学生が多いことが窺える。

以上のことを踏まえて、保育者にとって必要な音楽的専門性について考えてみると、幼児教育の現場におけるピアノ演奏の必要性についての計量テキスト分析の結果から、子どもたちの育っていく過程において、子どもたちと楽しく歌うことが出来るためのピアノ演奏、行事等で子どもたちが音楽に触れる際の保育者の援助する力という2点が見えてくる。これらは質問3-6.の結果を大きく俯瞰してみたときの、「行事に関連する体験」と「生活の中での体験」という2つの構図とも関連しているといえる。つまり、幼児教育の現場における音楽体験はこれらの「生活の中での体験」と「行事に関連した体験」の2つから成立していることが比較的多く、それらの体験を豊かにするためと、子どもたちの様々な育ちの部分において保育者の音楽的専門性が必要になってくると考える。

## 5. まとめ

保育者養成校の学生における音楽の活動に対する意識について実施されたアンケート調査と自由記述から限定的ではあるが今回その実態を把握することができた。冒頭で述べたようにカリキュラムの変更に伴い、限られた授業時間の中で保育現場にとって必要なピアノの演奏技術、歌唱の表現技術を習得していくことが課題である。一般社団法人保育教諭養成課程研究会の幼稚園教諭養成課程のモデルカリキュラムで示された

ように、新しく創設された領域及び保育内容の指導法に関する科目の授業計画の中にも保育現場にとって必要な子どもの豊かな表現のための音楽的専門性を育てていく内容を取り入れていくことが必要であると思われる。本研究では幼児教育の現場ではピアノを演奏することが必要であると考えている学生が多く、子どもの育ちにおいても幼児期の音楽体験は重要であると考えている傾向があることが示されたことから、保育者養成課程において保育現場に必要な音楽的専門性を学生に習得してもらうことの重要性が改めて認識できた。しかし、本研究では保育者にとって必要な音楽的専門性の具体的な内容までの知見を得ることができなかったため、今後の課題として検討していく必要がある。また、幼児期に歌唱することや楽器を演奏することが好意的だという傾向は高かったが、ピアノを演奏することが好きだという傾向は減少することから、その原因も深く探っていく必要があると思われる。また、本研究は保育者養成校の学生に対しての実態調査にとどまっているが、今後、現場の保育者を対象に調査を実施する等の多角的な研究を展開していく必要があると考える。

## 引用文献

- 1) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会：平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1385790.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm), 2017.3.
- 2) 源証香, 小谷宜路：「『保育内容』研究のあり方に関する一考察－保育者養成校における担当教員の専門分野の実態調査から－」, 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 第13巻, 2014, p12
- 3) 無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編：幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案, 萌文書林, 2017, p80
- 4) 無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編：幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案, 萌文書林, 2017, p78
- 5) 無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編：幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案, 萌文書林, 2017, p59
- 6) 山本真紀, 渡辺厚美：「保育者養成における音楽的専門性の育成に関する研究－幼稚園教員及び学生への質問紙調査を手掛かりに－」東京未来大学保育・教職センター紀要 第6号, 2019, pp103-104